



### 45 なぞなぞ

(グリムの昔ばなし)

「私がとけないなぞをだしたら、その人の妻になる。なぞがとけたら、その人は命を落とす」という、高慢だが美しい王女さまのおふれに応じて、たくさんの人が命をおとしてしまいました。

それでも若い商人は、かしこい召使いを連れて、なぞをだしにいかうとしました。

「見知らぬ王女に殺されるぐらいなら」と両親が用意した毒で、馬が死にました。

馬の肉を食べて三羽のカラスが死に、それを食べて十二人の山賊が死にました。

商人は、王女さまに「一回でひとつ、二回で三つ、三回で十二。なあんだ」となぞなぞをだしました。

王女さまは考えましたが見当がつかず、夜に商人の寝室へ忍びこんで、寝言で答えを言わせようとした。

しかし、かしこい召使いは、主人のかわりに寝たふりをして答えを教え、王女さまが来た証拠に服をつかみ取りました。

翌朝、王女さまは十二人の裁判官を呼びよせて、その前でなぞをといてみせました。

商人はすかさず「王女さまは夜中に忍びこんで答えを聞いたのです」と、証拠の服を裁判官に見せました。

裁判官は、その服に婚礼の金銀の刺繍をほどこさせ、王女さまは商人の妻になりました。

# 高慢な王女さまを、 夢中にさせたなぞなぞです。

ローム君の新・博物日記

第45話

## 世界昔ばなしを科学する

このシリーズは、半導体技術で世界に貢献するロームがお届けしています。おなじみの世界の昔ばなしの中から毎回テーマを一つとりあげ、そこに隠れているいろいろな不思議を科学の視点で見つめます。さて、今回のおはなしは…

バックナンバーはロームの文化支援のサイトでご覧いただけます。

ローム 昔ばなし

検索

### ●世界中にある「なぞなぞ婚」のお話

一国の王女さまがなぞなぞで縁談を決める、という今回のお話。実際にはありそうもないことですが、昔ばなしとしては一般的で、ヨーロッパのほぼ全域をはじめ、中近東、中国、北アフリカにまで広く伝わっています。プロポーズする男性がなぞなぞを出す以外に、王女さまからなぞなぞを出すパターンもありますが、どちらにも共通しているのは失敗した求婚者が命をおとすか、牢屋に入れられてしまうこと。ずいぶんひどい仕打ちのようですが、これは昔ばなしの特徴のひとつである「極端化」です。求婚に失敗すれば死ぬという現実にはありえない極端な展開が、聞き手の心をお話に引き込むのです。ただしこの王女のようにかしこい男性を夫にしたがるのは、今も昔も変わらない女性の現実的な願いのようです。

### ●「なぜ？」から生まれた世紀の「発見！」

ところで、だれも答えを知らないなぞなぞに挑んだ人がいます。それは常識を変える新発見や発明をした科学者です。そのひとり古代ギリシャのアルキメデスは、王様の王冠が純金かどうか確かめよ、という難問を与えられました。王冠の体積さえ分かれば、同じ大きさの金塊と重さを比べられますが、複雑な形をした王冠を計るのは難しいことでした。悩んでいたアルキメデスはあるとき、風呂につかり、お湯があふれるのを見て「ヘウレカ(我、発見せり!)」と叫びました。

王冠を水に沈め、あふれた水の体積を計れば、王冠の体積と同じになるはず。この発見は「アルキメデスの原理」という重要な法則につながりました。発見の瞬間、アルキメデスはよろこびのあまり裸で風呂場から通りに飛び出したといわれます。「なぜ？」と考えつづけたからこそ、ささいな偶然でひらめきが生まれ、そのよろこびも大きかったのでしょうか。

### ●なぞなぞは脳を育てる？!

さて、なぞがとけて「やった!」と思うとき、頭の中では何が起きているのでしょうか。人の脳内には約1000億以上の神経細胞(ニューロン)が編み目のように広がっています。神経はお互いに情報をやりとりして、考えをまとめ、答えを出します。ところがなぞなぞのような新しい問題を解くには、いつもと違う神経回路を使わなくてはなりません。そして、今まで関わりのなかった神経同士がつながったとき、新しい思考やひらめきが生まれるのです。神経は使えば使うほど活性化して、形も変わります。そしてなんと、年齢に関係なく発達しつづけられるそうです。体の成長は止まっても、脳は一生成長できるのです。自分は頭がかたいと思いこんでいる大人こそ、なぞなぞで脳を育てて、ひらめき力を伸ばすチャンスかもしれませんね。

昔ばなし監修/昔ばなし研究所所長 小澤俊夫